

令和 7 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 生活科学部

フリガナ イザワ サチ
氏名 井澤 幸

研究期間 令和 7 年度

研究課題名 離島における在宅高齢者の継続居住を支える環境—愛知県佐久島を事例として—

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	井澤 幸	生活科学部	准教授

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

本研究の対象となる愛知県佐久島は、2000 年に 48.5% (人口 344 人) であった高齢化率が 2020 年には 55.4% (人口 196 人) と人口減少と高齢化が進んでいる。これにより、地理的な状況に加え、人口規模の縮小により、高齢者の生活には欠かせない医療や介護といった支援を受けることが今後さらに困難となることが懸念される。一方、高齢期の住まい方は出来るだけ自宅や住み慣れた地域で過ごす、「地域居住 (エイジングインプレイス)」が有効であるとされ、地域包括支援システムもこの考え方にに基づき構築されている。離島の場合、このシステムがインフォーマルな形で形成されているのではないかというのが本研究の仮説であり、それらがもたらす環境要因を明らかにすることで、僻地の地域づくりに資することを目指す。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

高齢期 (65 歳以上) の生活スタイルは、壮年期 (40～64 歳) の暮らし方の延長にあるという考えのもと、調査対象者は両世代とした。対象者は壮年期の女性 2 名と高齢期の男性 3 名、女性 3 名の合計 8 名である。調査方法は①暮らしに関するインタビュー②住居及び自宅周辺の空間調査、③1 週間の行動記録調査である。インタビューは研究代表者らがヒアリングシートに沿って行う、半構造化面接とした。1 週間の行動記録は、過ごした場所、目的、相手、移動手段について、グラフと地図への記載を対象者自身が記録するよう依頼した。調査は 2025 年 6 月～10 月である。倫理的配慮については調査時に書面で説明している。

分析は、得られたデータを可視化し、人とのかかわり、滞在場所、住民の役割について、傾向を探った。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

研究の結果、以下の4点が佐久島の高齢者の地域居住を支える環境として明らかになった。

第一に、生活圏と移動手段は狭い島内においても、車・バイク中心の事例では、行動範囲が広く、高齢期であっても徒歩以外の移動手段があることが、活動を広げる要因となっていた。

第二に、高齢期になっても壮年期からの仕事を継続する事例が、6事例中、現在90代の無職の女性を除いて、5事例で確認できた。これらの仕事は、農業や漁業、自営業の飲食店や建設業であり、高齢になっても仕事を継続できる職種であった。飲食店や建設業を営む場合は、日常的に、他者が自宅兼仕事場を訪れる場面がたびたびみられ、行動範囲が限られるにも関わらず、他者との交流が盛んであった。

第三に、8事例中2事例の壮年期の対象者、3事例の高齢期の対象者は、島の縫物サークルや消防団、町内会長、学校評価委員といった地域での役割を担っていた。会合や活動での参加が、定期的に発生することで、外出や人とのかかわりが維持されていた。また、それらの役割により、住民の結びつきが支えられるとともに、地域への愛着や自己有用感につながっていた。

第四に対象者の行動範囲は、佐久島と一色港を結ぶ船の発着所である、西港と東港を起点として、島内の中心部に位置するJA、郵便局、学校周辺に集中していた。佐久島特有の西港と東港を結ぶ主要道路の中心部に、島民の生活に直結する施設が立地している空間構成が、島民の行動範囲の重なりを生じさせていた。動線が交錯する拠点で、日常的な住民同士の関わりや、情報交換を行なうことが可能となっていた。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①高齢者	②離島	③地域居住	④佐久島
⑤高齢期	⑥壮年期	⑦役割	⑧行動範囲

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

今回の調査では、壮年期2名、高齢期6名と年齢層に偏りが生じた調査となった。今後は壮年期の対象者を中心に事例を増やし、さらなるデータの収集に努めたい。また、住居部分の調査については、収集できたデータが不十分であったため十分な分析が行えなかった。この点についても調査を継続してデータ収集を行いたい。